九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

言葉と存在 : シュテファン・ゲオルクの一つの詩に対するハイデッガーの解釈を中心として

習田, 達夫
九州大学教養部 : 教授

https://doi.org/10.15017/6796098

出版情報：言語科学. 2, pp.7-17, 1966-03-05. 九州大学教養部言語研究会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

言　葉　と　存　在

―シュテファン・ゲオルグの一つの詩に対するハイデッガーの解釈を中心として―

習　田　達　夫

ハイデッガーは彼の論文「言葉」（"Das Wort", aus "Unterwegs zur Sprache" 1959. S. 217 − 238）の冒頭に，ヘルダーリンの挽歌「パンと葡萄酒」（"Brot und Wein", Hölderlin, Gesammelte Werke, I Bd. "Gedichte" S. 156）のなかから，次の句を引用してくるのであります。

○何故にあの古き聖なる劇場はまた黙しているのか？

○何故に一体奉納の踊りは楽しくないのか？

私はいまヘルダーリンについて語る時間は勿論，知識も持ち合せていないのでありますが，ハイデッガーがこの詩を掲げたということには意味があると思うのであります。

ヘルダーリン（1770 − 1843）が生きた時代は，まさに中世カトリックの精神が内部から失われ，その形骸のみが持続し，人々は真の神の姿を見失つたまゝ，因習のうちに埋没しつつあった時代であると云われているのであります。ドイツ帝国は更に小さな夫々の絶対主義国に分割せられ，中世的封建主義の圧政のもとに，人々は去勢せられた状態にあったのであります。ヘルダーリンはそのなかから，真の人間精神を回復するために，血の出るような叫びを実践したのであります。荒涼たる精神の残骸のなかに立って，ヘルダーリンの歌ったこの詩によって，ハイデッガーが先ず最初に暗示するものは存在喪失であります。

ヘルダーリンのこの詩は九節からなっており，ここに挙げられているのはその第六節に属する部分であります。テーベやアテンが栄えた頃には，オリンピアには神々の剣や鎧の音が響き黄金の戦車が轟音をたてて走ったのであります。しかし，いまはそれがありません。いにしえの神の劇場はしづまりかえっていて，そこにはもはや神々の声はありません。たとえ奉納の踊がありましても，それは徒らに騒がしいばかりで，そこにはただ空虚があるに過ぎません……。友よ，我々はおそ過ぎた。勿論神々は生きている。しかしいまは彼等は天上の世界へと行ってしまった……。これはたしかに挽歌であります。独逸ロマンティークのこの詩人の表現するところは，古代ギリシアの形式を持って居ります。ヘルダーリンのこの詩とともにハイデッガーは主張するのであります：嘗ては神々の現われる場所であったところに，

今は神々がなく，嘗ては既に神々の“言葉”であったようなそのような“言葉”がいまは既に拒まれている。嘗ては“語り”（das Sagen——神々からの言い伝えとしての言葉）そのものの内に神々との近づきがあった。然しいまはそれがない。と。

しかしヘルダーリンのこの詩のもとに，ハイデッガーによって窮極的に求められているところのものは，もはや決して神々の元の姿そのままの回復にあるのではありません。いまは既に神々がいないのであります。否それどころか神は既に死んでいるのであります。それはやがてニーチェによって叫ばれ，そしてハイデッガーの“Nietzsches Wort, Gott ist tot”に於て明らかにせられたところであります。

そしてこのことは，第二次世界大戦の結果，独逸の人々が，“人間”を失って虚無に陥っていく姿を，凝視してきたハイデッガーの心情そのものに外ならないのであります。このことに就きましては，ハイデッガーが彼の故郷（Messkirch）に於いて1955年になされた講演“Gelassenheit”の中に痛切な表現を持っているのであります。

いま，ハイデッガーの求めるものは，もはやヘルダーリンの求める神々の姿でもなければ，また神々と交渉する人間の姿そのものでもなかったのであります。ハイデッガーはいいます。“語り”（das Sagen）とは，本来自からのうちに，語るもののみたもの（was die Sagenden erblickten）を顕はならしめるものであった……筈のものであります。それ故に，そこには神々と人間とを越えて，直接に，明るさそのものを顕はにするものがなければならない。と，ハイデッガーは考えるのであります。

ここに於てハイデッガーは存在喪失の暗示に続いて第二にギリシア悲劇“Antigone”のなかの詩を引用することによって，このような“語り”のうちに我々が求めるものが，神々でもなくまた人間たちでもないとしたならば，それは一体何であるかを積極的に暗示するのであります。

アンティゴーネは云います。

○私に言葉を託したのは，全くツォイスではなかった。
○そうではなくて，私をそうさせる風習であった。

Nicht Zeus denn war's, der mir die Botschaft gab,
sondern Anderes, jener weisende Brauch

○昨日・今日からというものではなく，いつもそのときそのときに，
○かの指示を与える風習は現われ来る。しかもそれが何処から現われ来るかを誰も知ら

ない。

Nicht von heute denn und von gestern, doch während je und je,
Aufgeht er (der weisende Brauch) und keiner hat dorthin geschaut, von wo aus er ins Scheinen kam.

敵味方にわかれて戦ったテーベの二王子エテオクレースとポリュネケースとは互いに殺し合って死んだ。新王クレオーンに味方したエテオクレースは王命により立派に葬られたが，ポリュネケースの屍は，野に捨てられ鳥獣の飼食とされました。アンティゴーネは優しい妹イズメネーの止めるのもきかず，敢然として肉親の兄を葬るのであります。クレオーンは怒って彼女を獄舎に投じました。国王の命令は即ち国法であります。彼女は国法を破ったのであります。しかしアンティゴーネはこの時，毅然として述べたのが上述の章句であります。国法は人間の命ずる処に過ぎません。しかしアンティゴーネをして“言葉”を発せしめたものは，もとより人間ではありませんから，人間である王の命令に過ぎない国法などの拘り得るものでは勿論なかったのであります。悲劇は当然王の上にふりかかって来るのであります。

ソポクレースの原意に於きましては，恐らく「この命令は決してツオイスによって与えられたものではない」ということに，換言すればこの命令は神の掟ではないというところに，アンティゴーネの主張の根拠が置かれていたようにも取れるのでありますが，ここで注意すべきことは，ハイデッガーは，既にこの有名な章句に対するヘーゲルの解釈を意識しているということ，そして更にヘーゲルを越えることを企てていることが明らかであるということであります。

ヘーゲルは，アンティゴーネのこの言葉を，彼の著書（Hegel. “Phänomenologie des Geistes”, “Grundlinien der Philosophie des Rechts” u. s. w.）に屢々引用することによって，彼の人倫的実体（die Sittliche Substanz）としての愛（die Liebe）の積極的定在を説くのであります。ヘーゲルでは風習としての愛の定在（肉親の兄を葬るという）は，もはや神の命令ではなくして，「誰がいつはじめたとも知るものもない永遠の法」であるという表現のもとに，精神（der Geist）の An-und-für-sich-sein の定在を説いたのであります。ヘーゲルに於きましては，精神は主観的意志として道徳の世界を展開するのであります。主観的意志は，当然その根底に横たわる普遍者である善そのもの（an sichに善なるもの）としての精神，即ち自己（sich）に向う（für）ところのもの，という意味で Für-sich-sein として措定せられたところのものであります。然しこのような Für-sich-seinとしての主観的精神は，未だ附随する直接性（人間としての自然性）の故

に，如何に善との一致に努力しても，それは結局は単なる確信（das Gewissen）であること以上に出ることは出来ないのであります。ここに精神の顕現活動は直接に端的にその積極性が否定せられるのであります。そこで精神は，いまは主観的意志であることに死ぬことによって，はじめてその弁証法的運動を回復し，その根底のAn－sich－seinの自覚へと到達するのであります。このような An－sich－sein の自覚に於ては，もはや主観的な意志活動はないのであります。それ故にいまや新王クレオーンに対するアンティゴーネの反抗は，単に一人のアンティゴーネの主観的意志に基く道徳的基礎，乃至は彼女の良心の如きものにもとづくものでは決してなかったのであります。そうではなくして，そこに於ては既に根底の An－sich－sein としての善に自覚した精神の一つの契機としてのアンティゴーネの行為があるのみであります。従ってそれはアンティゴーネの行為を契機とはしておりますが，しかしそれは彼女の主観的意志に依るのではなくして，その主観的意志の根底に自覚にまで昇ってきた An－und－für－sich－seinの精神の定在であります。そこに実現し来るものは人間的道徳的なものでもなく，また神的なものでもありません。An－und－für－sich－sein としての精神の定在である愛（肉親の兄を葬るという）は，もはや人間的な王の権威をもってしても如何ともすることが出来ない客観的定在であります。ヘーゲルは、愛の定在としてのこのようなアンティゴーネの行動を，人間の主観的な意志を超えたものとして，いつどこからということのない永遠の法である風習（die Sitte）として措定し，このような愛の明るさの定在を人倫的実体と称したのであります。しかしヘーゲル哲学に於ける理性の弁証法的運動に於ては，アンティゴーネを契機として実現するAn－und－für－sich－seinである精神，即ち愛の定在は，既に人倫的実体であるとはいえ，なおその有する直接性（自然性）の故に崩壊することによって，精神の深まりへと更に進展することが要求せられているのであります。

然しハイデッガーは，アンティゴーネの同じこの言葉によって，愛の積極的定在をではなくて，むしろあらゆる積極的定在を否定することによって，この“言葉”のうちから，その仕方の消極性にも拘らず，直接に絶対的な積極的な明るさを掴み取ろうとするのであります。それ故にハイデッガーに於ては“私に言葉を託したのはツォイスではなかった”というこの同じ句は，この限りではヘーゲルと同様に，人間と共に神をも止揚して居るのでありますが，然しハイデッガーの考える風習は，もはやヘーゲルのそれの如く精神の発展的定在では決してなかったのであります。“そうではなくて，私をそうさせる風習（der weisende Brauch）”は，いまは永遠の沈黙のうちに埋れているとはいえ，実はこの風習が直接に積極的な“言葉”を発しきたることを彼は明らかにするのであります。ハイデッガーは，いまここにアンティ

ゴーネのこの詩のうちに，“語り”即ち“言葉”なるものを把握したのであります。アンティゴーネの言葉は，いまはハイデッガーのいう意味での“語り”即ち“das Sagen”なのであります。“昨日・今日からというものではなく，いつもそのときそのときに……”と歌うとき，“言葉”がこの“言葉”を発する人に“まなざし”を向けていて，“言葉”自身の方から“言葉”自身を顕はにしていくのであります。これが“語り”ということであります。

ハイデッガーは，このことを今はアンティゴーネに依らずして，此処に全くそれとは別に，新らたに現代独逸の代表的詩人の一人でありますシュテファン・ゲオルゲ（Stefan George 1890 – 1933）の詩“言葉”（“das Wort” 1919 発表）を提示して，この詩をまったくハイデッガー独自の仕方でもって分析し，このことによって，ここに（第三番目に）はじめて“言葉”が“言葉”として，直接に存在を明らかにするものであることを具体的に解明することになるのであります。

1. はるかなるむこうの不思議又は夢を
   私は私の国の際（きわ）まで持って来た

   Wunder von ferne oder traum
   Bracht ich an meines landes saum

2. そして白髪の女神ノルネが
   その名を彼女の泉のなかに見出すまで待った ——

   Und harrte bis die graue norn
   Den namen fand in ihrem born ——

3. それからあと私はそれをしっかりと強く握りしめていることが出来た
   いまそれはくにざかえを通じて花咲き輝いている……

   Drauf konnt ichs greifen dicht und stark
   Nun blüht und glänzt es durch die mark ……

4. 或るとき私はよい旅の後に着いた
   深い色にかがやく一つの宝石を手にして

   Einst langt ich an nach guter fahrt
   Mit einem kleinot reich und zart

5. 女神は長い間探し求めたそして私に告げた：
〈そのようなものはこの深い底には何も眠ってはいない〉

Sie suchte lang und gab mir kund:
〈So schläft hier nichts auf tiefem grund〉

6. そこで宝石は私の手から流れ去った
そして私の国はもはや決して宝を得なかった……

Worauf es meiner hand entrann
Und nie mein land den schatz gewann ……

7. このようにして私は悲しみのうちに断念することを学んだ：
言葉のない処には何物もなくてよいではないか。

So lernt ich traurig den verzicht:
Kein ding sei wo das wort gebricht.

この詩の 1, 2, 3, は次のことを語っているのであります。詩人は遠方から驚歎すべきものとして語りきかせられたところのものへの名前，または詩人の夢のうちで現われたところのものの名前。この二つは詩人自身に拘るところのものであります。そしてそれはまた存在する者（das, was ist）と思われているのであります。

しかしこの存在する者を，存在者（das Seiende）として，詩人は手許に離さずに握って置こうとするのではなく，却ってそれを表現しようとするのであります。そこで名前が必要となるのであります。これが一般に言葉（das Wort）といわれているところのものであります。

このような言葉によって既に存在者であり，また存在者と考えられているものは，捉え得るものとなり，親しきものとなって輝き，花咲き，そして国の到る処，美しきものとして支配するようになるのであります。詩人はこの名前を求めて詩を作るのであります。そのために詩人は旅をして，それが満足される処へと行かなければならないのであります。そして詩人のこの旅は，遂にこの国の際（きわ）のところまで行って，そこで終るのであります。そこがこの詩人にとって安全な範囲内であったのであります。詩人の国境（くにざかえ）には泉があります。その泉から，老いた運命の女神であるしらがのノリネが名前を汲み上げるのであります。そして詩人に言葉を与えたのであります。それは詩人が自から存在者であると

思っているものを，表現するに足るものと信じているのであります。そこで詩人の欲望は充され，彼の詩は栄え輝くことになったのであります。

さて，そこで詩人は次に Einst langt ich an nach guter fahrt と歌っているのであります。しかしハイデッガーによれば，この“Einst”はもはやくWunder von ferne oder traum〉を彼の国の際（きわ）まで持ってき得るような旅についていわれている言葉ではなくして，むしろ Bei der einzigartigen Fahrt に於て……ということを意味しているのであります。それは何日，何処で行われたという旅においてではないのであります。

そうではなくして，かのアンティゴーネをして「昨日・今日からというものではなく，いつもそのときそのときに“そのような”（具体的姿を持った）風習が現われ来る。しかもそれが何処から現われ来ったか誰も知らない」と歌はしめた詩にみられるように，ただこの旅で／何日何処でとは限定出来ない程に唯一に具体的なこの旅で，詩人は宝石を手に入れたのであります。しかしこの旅は，もはやヘーゲルの如き積極的定在を持つものではありません。それはたしかに“よい旅”であったのであります。しかしそこには，敢然として主張するアンティゴーネの姿の如く固定された形は何もありません。従ってそれに対しては名前の付けようがありません。このような旅で得た宝石には，その由来の限定が既に欠けているのであります。否。その宝石はその由来を限定し得ない程に深い色をもって輝いているのであります。

詩人は，この深い輝きの宝石を“現に”手のうちに握りしめているのであります。彼はいまや，それの名前を求めて運命の女神の泉へとやって来たのであります。しかし既に明らかな如く，それは無駄でした。運命の女神は，長い間それを探し求めた末に，詩人に告げたのであります。〈そのようなものは，この泉の深い底には何も眠っていない〉と。泉の底に眠っているものは，存在者が表現されるためにのみ醒めさせればよいのであります。そのような名前や言葉というものは，事物に夫々添えられ，それを表現するためにあるところの固定的な要素（der Bestand）でしかなかったのであります。

詩人がいままで彼の詩の言葉を汲み出していたこの泉は，いまはもはやこの“深い色”の宝石に対しては何物も与え得ないのであります。従ってお告げの内容は否定的であります。即ちその宝石には名付ける言葉は見出せないということであります。そこで宝石は詩人の手から流れ去ってしまったのであります。即ち詩人は宝石を存在者（das Seiende）として表現する手段（てだて）を失ったのであります。もはや詩人の国の何処にも宝石の花は咲き輝くことはなかったのであります。

然しここでハイデッガーはいうのであります。かの女神のこのお告げ（die Kundgabe）

は，そのかたちの消極性にも拘らず，それ自身が既に或る種の表現（die Anssage）でなければならない（ibd. S. 222）というのであります。この“或る種”ということは，それ自身が既に積極的な開示（die Eröffnung）のすがたを持つものと解しなければならないのであります。長い間探し求めたのちに女神は告げた： 詩のこの行がコロンで終っているということは，女神がここで何物かを既に積極的に告げていることを示しているのであるとハイデッガーは主張するのであります。それは何か？その名は，もはやノルネの泉の底には眠ってはおりません。名前の与えられない宝石は流れ去りました。

しかしそのような宝石はもはや必要ではありません。ここで“言葉”は詩人の国のうちに制限的にのみ通用するものであることを脱皮するのであります。そして“言葉”は詩人の国境を超えて輝きわたるのであります。そしてこの“言葉”の真の姿が……女神は告げた：のこのコロンに続いて，既に積極的に顕はとなっているとハイデッガーはいうのであります。いま“言葉”のこの真の姿，“言葉”のこの深い積極性が，正に詩人を把えたのであります。宝石が流れ去り，もはや決して宝石は得られなくなったときに，詩人ははじめて“言葉”の真の積極的意味が“在る”ことを知ったのであります。 So lernt ich traurig den verzicht： 詩人は断念すること（verzicht）を知ったのであります。ここに於いてもまた，詩のこの行がコロン（：）で終っておりますことは，この“断念”することが直ちにそのまま終っているのではないことをハイデッガーは注意するのであります。名前を見出すことが出来ず，悲しみのうちに宝石を断念することを知ったのであります。人間にとって執着となる宝のもつあらゆる制限を断ち切ることによって，ここに制限のない明るさの顕現を学び得たのであります。悲しみは，この明るさの生みの苦しみであったのであります。断念することによって，いま制限の外の明るさのなかに“放ち入れられる”（eingelassen）のであります。即ち詩人は“断念することを学ぶ”ことによって，ここに突如として“言葉”の全く別な明るさによって照らされたのであります。

ハイデッガーは，このことを次のような印象的な表現を用いて述べているのであります。

……Nein. Anderes, Bestürzendes geschiet.…… Das Wort zeigt jäh ein anderes, höheres Walten.

Das Wort …… nicht nur Mittel der Darstellung des Vorliegenden.

Dem entgegen verleiht das Wort erst Anwesen, d. h. Sein, worin etwas als Seiendes erscheint.

Dieses andere Walten des Wortes blickt den Dichter jäh an. (ibd. S. 227)

（省略は筆者）

それは驚くべきことであります。そこには言葉がないのではない。ただ如何なる制限的な言葉もそこにはないのであります。そこでは“言葉”はただこの明るさの具体的姿そのものをのみ表現するのでありまして，“言葉”にはもはや抽象から発するような何物もありません。そこに於いては“言葉”はまさに明るさそのものを，物として具体的に“在”らしめるのであります。（……，das erst das Wort ein Ding als Ding sein läßt. ibd. S. 229）

“言葉”のこのような積極性が，いまや断念によって直接に顕現し来ったのであります。それ故に断念自身が，実はそれ自身，既に以上のような“明るさ”，換言すれば物を物として具体的に在らしめる“言葉”の積極的表現を持っていたのであります。この意味で断念はまたそれ自身が“一つの語り”（ein Sagen）であったのであります。断念はそれ自身negativな表現を持っていますが，それは何処までもかの名前に対してであったのであり，名前に対して拒否（versagen）しているのであります。ハイデッガーによれば das Verzichten als Sich－etwas－versagen という場合，普通の意味での単なる断念である場合には，Sich はDativ でありまして，詩人自身のこと（例えば欲望）についての断念ということになるのであります。このような断念は空虚に帰するに過ぎないのであります。然しながら，ここで詩人が拒む（versagen）ものはAkkusativ のものであります。それは断念それ自身が“自分を拒む”（Sichversagen）として，既に根底に於いて ein Sagen なのであることを示しているというのであります。即ちそれ自身が既に“das Wort”となっているのであります。それ故に，そこに於いては断念によって，あらゆる Sagen が Sagen として明るみのうちに“言葉”となるのであります。“言葉”は，明るみのうちに於ける“語り”の具体的な姿に外ならないのであります。それがとりもなおさず“物”なのであります。従って“言葉”という姿を持って物となったものは明るみのなかに輝き亙るのであります。かくて“言葉”は，自からの明るみによって物をはじめて真の“物”たらしめるのであります。ハイデッガーはいいます Das Wort be－dingt das Ding zum Ding と。“言葉”は物を物として明るみに在らしめるところの働き（die Bedingnis）なのであります。（ibd.S.232f）ここに Das Sich－versagen ist in Wahrheit ein Sich－nicht－versagen ということの根拠があると共に，“言葉”は明るさの“語り”の具体的姿として，それ自身が“在る”のであります。その在り方は，もはや名前で呼ばれるものではないのでありますから es ist ではなくして、es〈sei〉というふうに語られるのであります。“言葉”は既に現象を表現するものではないのでありますから、却ってただ es sei というかたちで“存在”の具体的な明るさを顕わにしているのであります。ハイデッガーはいいます。Fortan sei das Wort：die Bedingnis des Dinges と。

それ故に，かの詩の最後の一句がこの事実に追討をかけるのであります。言葉のないところには何もなくてよいではないか，〔Kein ding sei wo das wort gebricht〕と。“言葉”のないところには，物が存在する筈はないのであります。

しかし実はこの最後の一句は，その消極的な形式にも拘らず，積極的表現を持っていることは明らかであります。それは，ここに名付け得ない明るさのもとにある“言葉”の具体的な姿を顕わにしているのであります。しかしこの“言葉”には説明的な要素が欠けていますから，その意味では秘密（das Geheimnis）に属するといえるでしょう。しかし“言葉”自身の明るさは，この秘密を自から破り，自からの姿を直接に顕わにしているのであります。“言葉”はこのようにして直接に存在の明るさの積極的な“語り”の姿であったのであります。

かくて詩をきくということは，“真の言葉で語られる存在”の明るさに照らされるということであります。ハイデッガーはそれを詩を思惟する（denken）といいます。元来思惟するということは，存在の明るさが“言葉”（das Wort）になることであります。(Heidegger, Über den Humanismus S. 5）それ故に“言葉”はつねに存在の明るさに gehören（属する＝耳を傾ける）するものなのであります。

このように考えてきますと，思惟とは存在が自からの明るさを“言葉”という姿にまで schicken（贈る）したものであります。従って存在からの das Geschick（贈られたもの）という意味では das Schicksal（運命的なるもの）というべき姿をも持つものであります。

“言葉”は思惟であり，思惟は運命的な姿のもとに存在の明るさに gehören するものなのであります。“言葉”はこのような姿で存在の明るさを顕わにしてくるのであります。このようにして，“言葉”のうちにこそ存在の明るさは住むのであります。ハイデッガーが“Über den Humanismus”のなかに於いて述べている実存（Eksistenz）ということは，このようにして，“言葉”のもとに“現”（Da）が存在しているということに外ならないのであります。ゲオルゲがEinst langt ich an……と歌ったとき，このEinstに於いてハイデッガーのみたものは，まさにこの“現”なのであります。この“現”に於いて，存在の明るさをみたのであります。それが“言葉”にまでもたらされるためには，もはやノルネの泉の底を探す必要はありません。却って存在の明るさが直接に真の“言葉”の姿をもって，ここに立ち現われるのであります。このようにして“言葉”は存在からの伝達（die Überlieferung）を，はじめて“支え得るもの”（das Haltbare）として経験するのであります。“言葉”は存在からの投げかけ（der Wurf）であり，従ってまた存在から投げかけられてある（geworfen sein）ものとして，自からの運命を持つのであります。このような姿のもとに，

“言葉”は存在の明るさを現わすのであります。否。存在は，みづから輝きながら“言葉”に達するのであります。（das Sein kommt sich lichtend zur Sprache.……）

このようにして私は悲しみのうちに断念することを学んだ：

言葉のない処には何もなくてよいではないか，

それは正に“言葉”への途上（Unterwegs zur Sprache）にあるというべきでありましょう。（Es ist stets unterwegs zur Sprache. ——über den Humanismus S. 45—）

昭和４０年４月２１日

九州大学教養部　言語研究会に於て発表

SYNOPSES OF JAPANESE ARTICLES

AND ORAL PUBLICATIONS

WORDS AND BEING

Tatsuo Shuta

Referring to Hölderlin's "Brot und Wein"(Bread and

Wine), Heidegger remarks: in 'Sagen'(saying) was once the approach to Gods, but it is not now.....; which suggests that 'being' has been already lost in the modern age. Further he goes on to quote Antigone's exclamation from Sophocles' tragedy:

> "Not now, indeed, nor yesterday, but for aye
> It lives, and no man knows what time it
> (the unwritten and unerring law) came"

It is by these words that Heidegger makes an endeavour to express the absolute brightness of 'being' rather in the negative way contrary to Hegel's exposition of them; and he brings his endeavour to effect by analyzing Stefan George's poem "Das Wort"(The Word) after his own fashion. Here his aim is to explain that words as such cannot express the concrete brightness of 'being' directly until they are relinquished from the definition by abstract conceptions.